

## 17-3 授業解題

授業者：中山 莉麻 先生

単元名：飛べなかつたハト

授業タイトル：飛べなかつたハト

教科（領域）：道徳

対象：中学1年生

### 1. 【グローバル人材育成の観点からみた】本授業の「強み」

本授業は、中学校道徳科においてしばしば用いられている教材「飛べなかつたハト」をグローバル・エシックスの視点から再吟味することで、動物の命についてより開かれた視野からの探求学習を促そうとするものである。そんな本授業の「強み」として特筆すべきは、そこに道徳科授業としての堅実さとグローバルな視点の導入という挑戦を両立させている点である。

本授業の主要教材「飛べなかつたハト」は、病気のハトの安楽死を扱った読み物教材であり、道徳科ではいわゆる道徳的ジレンマの教材に位置付けられるが、これらの教材の性格は、道徳科としてはスタンダードなものであり、それを使う本授業は非常に堅実なものと評価しうる。ただし本授業では、冒頭に人類とペットの共存の歴史について触れるとともに、現代社会における人類共通の課題としての「動物福祉」についての学習を導入として用いることで、この教材をグローバルな文脈に置きなおした。そのことを通じて生徒たちの道徳的な思考・判断をより開かれたものとすることが目指されていた。結果、生徒たちの議論は単に「生命は大事」というだけでなく、「生命を大事にするとはいっていいどういうことなのか」という問い合わせていった。

このように、堅実さと挑戦の双方を兼ね備えている点を、本授業の「強み」として強調しておきたい。

### 2. 授業のさらなるグローバル化に向けて

本授業は全一時間として構成されているが、この授業内で萌芽的に示された生徒たちの思考の深まり・広がりは、とても50分で収まるものではないと思われる。生徒たちは本授業において、人間とペットの共存という課題は人類共通のものであることを知ったわけであるが、おそらく少くない生徒は、異なる文化圏における人間とペットの関係について興味を持ったように思われる。実際、人間とペットの関係、とくに今回のテーマであった安楽死を一つとっても、不治の病に罹患したペットに対する処遇は、文化によって異なる可能性が様々な研究で指摘されている。今後の課題としては、生徒たちに芽生えた興味関心を次の段階へ引き上げるために、そのような文化によって異なる価値観についての学習をいかに組織するかということがあるようと思われる。